2つの「平和のつどい」

中学生が強い思いを伝える

戦後80年、名張市内では2つの「平和のつどい」が催され、多くの人々が戦争と平和について思いを巡らせた。中学生が語る平和への思いが、列席者を感動させた。

青蓮寺で「平和の集い」

太平洋戦争中に米軍爆撃機B29が墜落した現場の青蓮寺一ノ谷で8月15日、「平和の集い」が行われた。1945年6月5日、神戸を空襲したB29の1機が日本軍戦闘機の攻撃を受け、青蓮寺の山中（一ノ谷）に墜落した。搭乗員11人のうち2人は死亡し、9人はパラシュートで降下した。名張側に降下した6人と奈良県側に降下した3人はそれぞれ住民に捕らえられ、名張側の6人は東部軍管区（名古屋）に、奈良県側の3人は中部軍管区（大阪）に連行された。9人は何れも8月10日前後、日本軍により処刑（斬首）された。

この戦争による名張市の戦死者は1190人に上った。6月5日以降、米軍の戦闘機グラマンが再三襲来し、蔵持小学校や、出征兵士を見送る人々で溢れる赤目駅や美旗駅で機銃掃射を行い、約50人が死傷した。その他各所を焼夷弾で空襲するなど米英兵士への憎しみも強い時代であった。

墜落B29の機体番号の書かれた破片が青蓮寺の地蔵院の境内に落下した。前住職の耕野一弘さんはその破片を本堂内に安置し、「戦争の犠牲者は敵も味方も同じ」として供養していた。思いを引き継いだ現住職の耕野一仁さん（76）は地元の協力を得て、2006年墜落現場に追悼碑を建立し、翌年には、11人の米兵の氏名・階級・年齢などを記した石標を加えた。以来「平和の集い」は、同院、名張ユネスコ協会、市宗教者連帯会が共催してきた。根底には全てを包含し「小さな田舎の村から敵も味方もない世界平和を祈る」住職の祈りがある。

この日、日米の国旗の前でバイオリンとリコーダーで両国国歌が演奏され、耕野住職は、ロシア、ウクライナ、中近東の戦争などに触れ「戦争を憎み、平和の大切さを後世に伝えることを約束します」と追悼と誓いの言葉を述べた。

米国主席領事のアンナ・ワンさんは献花の後「毎年、敵味方を問わず、戦争で亡くなった人々を追悼して下さることに心から敬意を表します。この取組みが和解の力を思い出させ平和の大切さを再認識し、未来への希望を共有するものとなることを願います」と挨拶した。

3人の市立赤目中学2年生が「平和」について考えを述べた。

約100人の列席者は献花をし、平和のハトを放ち、心を込めて80回梵鐘を打ち鳴らし世界平和を祈った。

酒井妃依さんは家族と広島に行った時、「原爆ドーム周辺に80年前の重い空気感を感じた」「人は生きるか死ぬかの中で、お互いに残酷な心が芽生えることに気づいた。戦争は人を傷つけ殺すだけでなく、敵味方関係なく、人を狂わせる恐ろしいもの」と見抜き、「平和な日本が続くよう、誤りを正し続けなければならない」と話した。

藤田花笑さんは、この「平和の集い」の契機となった曾祖父で地蔵院前住職の耕野一弘さんの、日本の戦争犠牲者とB29搭乗員の慰霊・追悼を同じくする意志と、それを引き継いだ現住職の思いと行動を話した後、戦争の恐ろしさを語り「平和は戦争で犠牲になった多くの尊い命の上に築かれていることを忘れてはならない。青蓮寺に墜落した機体の破片には機体ナンバーが刻まれているが、この番号が後世に、悲惨な戦争が確かにあったことを知らせ、人類に今後のあり方を訴えかけているように思えてならない」と括った。

中村七葉さんは、「青蓮寺のB29の兵隊は、まだまだ夢も希望も未来もある若者達であった。戦争はその全てを奪ってしまった。戦争は、ただ弾が当たればよいという殺し合い。正しいとか間違っているとか関係なく、ただ命の終わりがあるだけ。これは本当に悲しいことだ。日常の何気ないことがちゃんと守られていることは奇跡だ。平和とは安心して自分のままでいられること。目の前にいる人に手を差し伸べること・・・」など「平和」について多くの「日常」を話した。